大谷石
ooyaishi
NPO法人 大谷石研究会
大谷石の魅力を全国のみなさんへお伝えする大谷石研究会の広報誌

「東京方面研修見学会」に参加して

NPO法人大谷石研究会 会員　冨田 和則
宙乃船建築設計事務所

令和6年6月15日、東京の池袋・目黒方面を巡る研修会に参加しました。

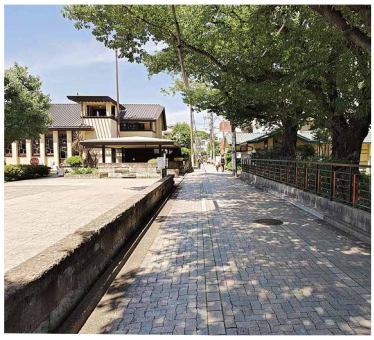
最初の見学先は「自由学園明日館」、建築家フランク・ロイド・ライトの設計した建物です。本館と講堂との間には「F・L・ライトの小路」という路があり敷地が分かれています。周辺のアスファルト舗装から一変し、この小路はインターロッキング舗装の中に白御影のピンコロ石にてロードサインがつくられた繊細な表情に合わせて、桜の大木の木陰が気持ちのよい路になっていました。人が腰を掛けて小休止するのに丁度よい高さでつくられた低い塀は、所々に水平を強調するように凸に積まれた大谷石でつくられていました。ライトのプレーリーハウス様式が外構の隅々にまで感じられます。敷地の周囲を見渡すと高層商業ビルが取り囲んでいて、この自由学園だけ低層で際立つ形で存在しています。今日の見学会は館長から詳細な解説をいただくことができましたが、幸いにも関東大震災や戦禍を逃れたエリアとして区画整理されていないために残ることができたとのことでした。

大谷石は建物外部では基壇に、内部ではエントランスの床、巾木、人が集まる部屋の暖炉などに使われていて、しっかりとしてまた温かく優しい表情で私たちを迎えてくれました。講堂は耐震補強改修を行ったとのことで、工期33か月の軌跡が展示されていました。写真を見ると屋根はおがくず断熱だったようです。舞台の額縁はボリュームが程よく分節された大谷石の袖柱で繊細につくられていて、ステージを引き立てているように感じました。もし、この建物に使われた石が大谷石でなかったら、どんな建物になっていたでしょうか?・・・と館長からの問いがありました。別の石では全く印象の異なる建物になっていただろうことと、大谷石がベースに使われているからこそ温もりの感じられる建物となり永く愛されてきたに違いないという確信が湧きました。

次に向かったのは「日本民藝館と旧柳宗悦邸（西館）」です。本館の玄関土間に入ると、正面に威風堂々とした中央吹抜階段があります。材寸の大きな木の階段は、長い年月をかけて磨かれて滑らかに光っていました。館内では陶器、漆器、彫刻他大小さまざまな民芸品を見ることができました。そして別館である西館の道路沿いにある長屋門は栃木県河内郡の日光街道沿いにあった門の移築とのことですが、大谷石瓦で葺かれていて重厚感がありながら繊細な加工技術で作られており、軽やかさも感じる瓦のディテールに驚きました。

最後は日本民藝館に隣接している駒場公園内の「旧前田家本邸洋館と和館」を見学しました。洋館は圧倒される絢爛な意匠の中、行き止まりのない口の字型回廊プランの構成と相まってより幻想的に感じました。戦国時代から永く繁栄が続いた御家と常人との違い、秘訣は何かと気になりました。和館では池田会員から建物の構造・造作材に使用されている木材の価値について詳しく教えていただきました。その中でも書院に使われている一枚板は圧巻でした。現代ではまず採れずまた使う機会もそうそうないであろう長尺で厚い板は、やはりこのように机・テーブルの天板か、あるいは床板として常に触れるところに使うのが一番よいのかと思いました。

大谷石が広い地域で使われ、文化人に愛されてきたことを改めて認識いたしました。会員の皆さまと貴重な情報を共有できる素晴らしいツアーに参加させていただき、心より感謝しております。



木陰と大谷石塀のあるＦＬライトの小路

明日館・大谷石の暖炉

民藝館西館の大谷石葺きの長屋門

旧前田邸洋館の煌びやかな内部